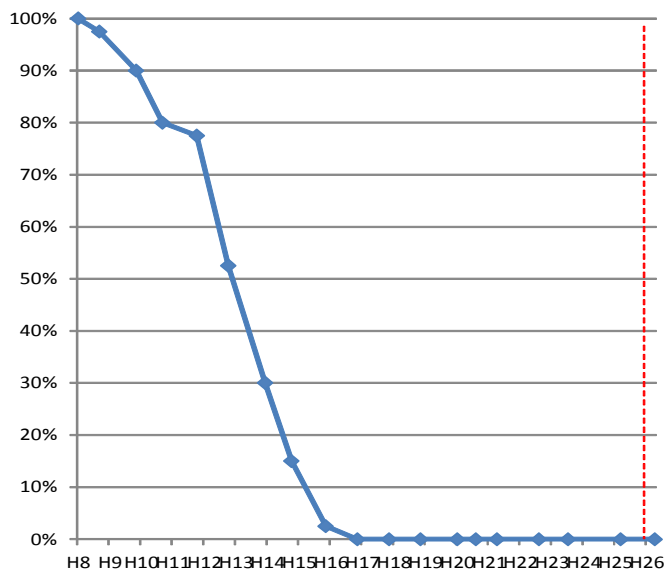


樹種名	キハダ	
科 目	ミカン科	
学 名	<i>Phellodendron amurense</i>	
分 布	アジア東北部の山地に自生しており、日本全土でもみることができる。	
樹木特性	陽樹であり、山地の斜面下部から沢筋に点在して生育する。耐陰性は低いことから閉ざされた林冠の下では生育しない。このことから、攪乱後には明るい環境では定着する。また萌芽力も強い。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は休眠するため寿命も長い。	
用 途	建築・家具・器具材に広く用いられる。 樹皮は生薬（健胃・整腸剤）や黄色染料として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	249 本／0.05ha (5,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 ミカン科キハダ属の落葉高木である。樹高は 10m~15m 程度で、20m 以上になるものもある。キハダの葉は、対生葉序（たいせいようじょ）で奇数羽状複葉（きすうじょうふくよう）である。5 月末から 7 月初旬にかけて、円錐花序の小さい黄色い花が見られるようになる。樹皮はコルク質で、外樹皮は灰色、内樹皮は鮮黄色である。適地土壌は、適潤性の肥沃地で土壌が深くスギを植栽してもよく育つような場所が適地である。	  
試験地での様子	ポット苗を植栽したが、植栽直後から平成 17 年度には全て枯死した。この理由としては、キハダ植栽地付近は窪地で梅雨期・豪雨時は水没地となり、無立木となっている状況であった。植栽時にトラクターによる整地と排水溝を設ける処理を実施した。植栽当初は順調に生育していたが、胸高径 5cm を越えるころから樹勢が衰え枯死が見られるようになった。植栽から 8 年で全木枯死となり他樹種への改植を実行した。キハダは試験地周辺にも多数自生していることから、枯死の原因は植栽地の環境要因（排水不良による根腐れ）と考えられる。	
被 害	野兎・鹿の被害は特に無かった。コウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が一部に見られた。（延べ駆除本数：1 本）	

キハダ 現存率



【現存率】

植栽直後から枯死が発生し、平成 14 年度に補植を実施したが平成 17 年度には全て枯死した。

原因は、植栽地の環境要因である不透水層の存在及び、ナラタケ菌等の木材腐朽菌の複合被害の可能性と考えられる。

また、当試験地内には自生するキハダが 14 本現存しており、樹勢は良い。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

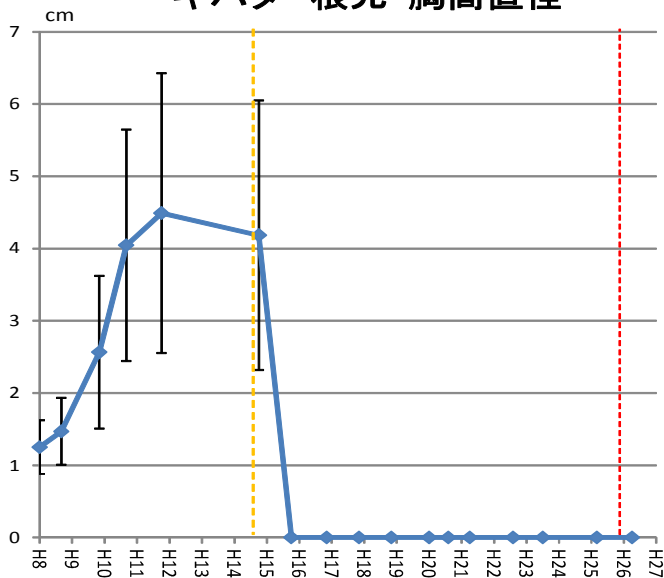
全ての個体が枯死するまでの肥大成長は、良好であった。

また、当試験地内には自生するキハダが 14 本現存しており、平成 26 年にその平均胸高直径は 11.68 cm であり肥大成長は良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

キハダ 根元・胸高直径



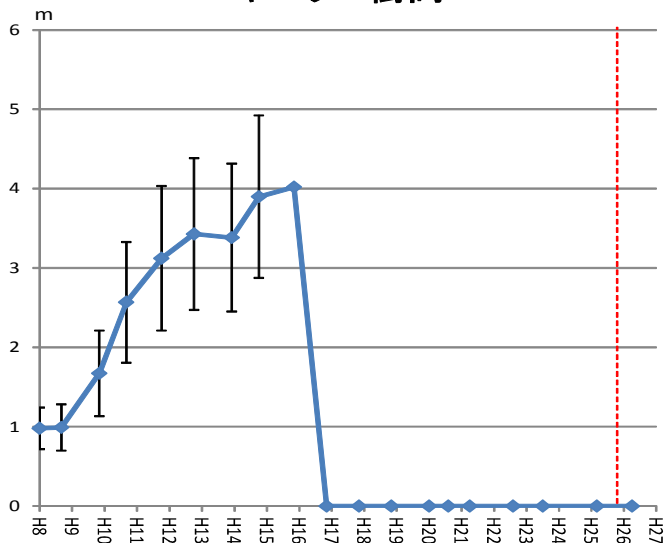
【樹 高】

全ての個体が枯死するまでの上長成長は、良好であった。

また、当試験地内には自生するキハダが 14 本現存しており、平成 26 年にその平均樹高は 9.77m であり上長成長は良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

キハダ 樹高



《プチ情報》

この樹皮からコルク質を取り除いて乾燥させたものは、生薬の黄檗（おうばく、黄柏）として知られ、薬用のほか染料の材料としても用いられる。